

春がくる前

小川未明

青空文庫

さびしい野原のほらの中なかに一本ほんの木立こだちがありました。見渡みわたすかぎり、あたりは、まだ一面めんに真まつ白しろに雪ゆきが積つもっていました。そして、寒い風かぜが、葉はの落おちつくしてしまつた枝えだを吹ふくのみよりほかに、聞きこえるものもなかつたのです。

木きは、こうして毎まい日にち、長ながい寒さむい冬ふゆの間あいだ、さびしいのを我慢がまんしていました。それにつけても、過すぎ去さつた春はる、夏なつ、秋あきの間あいだのいろいろ楽たのしかったこと、おもしろかつたことを思おもい出だしていたのであります。

その中うちでも、くびのまわりの赤あかい鳥とりが、枝えだに巢すをつくつて、三羽ばの雛ひなをかえして、三羽ばの雛ひなが仲なかよく枝えだから枝えだへ飛とびうつつていま

したのを、木は忘れることができませんでした。

「いまごろは、あの親子の鳥はどこへいったろう。さだめし暖かな土地へいって、ああして、楽しくさえずつたり、飛びまわったりしているであろう。そして、また、こちらが春になって暖かになつたら、忘れずにやってくるかもしれない。そのときは、もう三羽とも雛鳥は、大きくなっていることだろう。」と、木は思いました。

こうして、木立は、毎日、風の音を聞いて、白い雲を見つめるよりほかになかったので、さびしく、退屈でなりませんでした。

「ああ、早く春がきてくれればいい。」と、独りで野原の中で脊

伸びをして、あくびをしましても、だれもそばで聞いているものもなかったのです。

しかるに、ある日のこと、一羽の小さなうぐいすがどこからか飛んできて、この木のこずえに止まりました。

木は、さつそく、このうぐいすに話しかけたのであります。

「うぐいすさん、見れば、まだおまえさんはお若いわかが、この寒いさむのにどこへおゆきなさるのですか。そして、どこからおいでなさいました。」と、木立は、うぐいすに問うたのであります。

すると、年こそ幼いとが、りこうそうなうぐいすは、木のいうことを頭を傾けて聞いていましたあたまかたむが、

「私は、あちらのふもとのやぶの中からやってきましたなか。私は、

お母さんかあといっしよに、そのやぶなかの中で暮くらしました。いい香においのする花はなが咲さいていました。また赤あかい実みがなっていました。それは、いいところでした。私わたしは、お母さんかあといっしよなら、けつしてよそへはゆきたいなどと思おもうことはありません。

けれど、平常いつもお母さんかあは、私わたしに向むかって、町まちの方ほうへいつてはならない、おまえのようなよい子こがいつたら、きつと人にんげんが捕つかまえて、かごの中なかに入いれてしまいうだろう。これまで、このやぶから出でたもので、いくたり人にんげんに捕つかまって帰かえってこないものがあるかしれない。しかし人にんげん間は殺ころすのではない。かえって、うまいものを食たべさせ、暖あたたかにして、ときには水みずも浴あびさせてくれて、大事だいじにしてくれる。けれど、もう一しよ生かえ帰かえってくることができな

のだから、町まちの方ほうへいつてはならないといわれました。

私わたしは、なんだか町まちを一度ど見みたくてしかたがありません。たとえば、いくら見みたくても、お母かあさんを残のこしてゆく気きは起おこらなかつたのです。

その私わたしの大事だいじな、そして、このうえなく私わたしをかわいがってくださいましたお母かあさんが、この秋あき、病びょう気きで死しんでしまわれたのです。私わたしは、気きが狂くるいそうでした。毎まい日にち、悲かなしくて泣なきあかしました。そのうちに冬ふゆがきて雪ゆきが降ふりました。しかし、私わたしは、長ながい間あいだ棲すんだ、そのやぶを離はなれる気きはしなかつたのですが、このごろになつて、せめては、一度どなりと町まちへいつて、その景けし色きをながめたり、また私わたしどもの仲なか間まの生せい活かつを見みてきたいものだと思おもつて、

いま、旅立たびだつ途とちゆう中ちゆうにあるのでございます。」と、若わかいうぐいすは、目めに涙なみだをためて答こたえました。

木きは、しばらく、黙だまって聞きいていましたが、

「おまえさんは、幼おさないけれど、なかなかしつかりしていなさる。それなら、町まちへいっても人にんげん間に捕とらえられるようなことはあるまいから、見みてきなさるがいい。いくらお友ともだちが、いい生せい活かつをしてもうらやみなさるな。帰かえりには、またきつと立たち寄よつてください。」と、木きはいいました。

「そんなら、いつてきます。」といつて、若わかいうぐいすは、灰はい色いろの空そらをあちらへと、町まちの方ほうをさして姿すがたを消けしてしまつたのであります。

また、木は独りぼつちとなりました。

どこを見ても真つ白な雪が積もっていました。そして、絶えず寒い風が吹いて、身震いせずにはいられなかつたのです。夜になると、星の光がものすごく頭の上を照らしました。

明くる日から、木は、幼いうぐいすのことが気にかかつてなりませんでした。無事でいようか、人間に捕まりはしないかと、木は年をとっていましたので、いろいろのことが案じられてなりませんでした。

うぐいすは、町にいつて、高い煙突を見ました。車のゆくのを見ました。火の見やぐらを見ました。いろいろなものを見ました。そして、垣根や、軒端に身を隠して、仲間のいる家をのぞき

ました。すると障子のはまった箱の中に入つて、仲間がうたつていました。けれど、その箱はばかに狭く窮屈であつたのです。なんだか、そのなき声に、聞き覚えがあつたようでした。もう気が詰まるように感じて、そんなことをも考ふる余裕もなく、ふたたび野原の方を指して飛んできました。

「ただいま、帰りました。」といつて、うぐいすは、木立に止まりました。

木は、うぐいすの帰つてきたのを喜んで、

「町は、どんなでした。」と聞きました。

うぐいすは、これに答えて、

「たとえば町の生活がどんなによくても、私はやはり、お母さん

と暮くらした、山やまの生せい活かつがいちばん好すきです。「といいました。
うぐいすは、山やまのやぶへ帰かえるときに、一ひと声こえいい音ね色いろを出だして
なきました。野の原はらも、森もりも、木こ立だちはもちろんのこと、その音ね色いろに
耳みみを傾かたむけました。そして、彼かれらは、一じ時じに長ながい眠ねむりから呼さびさま
されたように、感かん心しんしたのでありました。
二、三日にちすると、春はるが、この野の原はらにも、木こ立だちにも、森もりにもやつ
てきたのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

初出：「まなびの友」

1921（大正10）年3月

※表題は底本では、「春《はる》がくる前《まえ》」となつて
います。

※初出時の表題は「春が来る前」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年9月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春がくる前

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>